



まえだ よしひろ
前田 義廣 さん

大字谷の小西橋付近にある愛宕神社^{あたご}では、かつての大災害を風化させないようにという思いから 60 年以上にわたって愛宕祭^{あたご}の行事が行われています。前田義廣さんは、現在、代表者としてその歴史を紡いでいます。

昭和 30 年 7 月 16 日午後 1 時 30 分に出火した火災は、瞬く間に 15,000 坪（サッカーグラウンド約 6 面分）を焼き、207 世帯が罹災^りする大災害になりました。後にこの火災は「桜井大火^{さくらいたいか}」と呼ばれ、二度とこのような火災^{あたご}が起こらないようにという願いを込めて、有志によって愛宕神社が建立されました。

毎年、愛宕祭^{あたご}のために準備する愛宕神社の総本宮・京都のお札は、地域の人々にとっての防火のシンボルとして重宝されています。70 年前の火災のことを知る人が減り「被災された人は高齢になっている。次の世代に歴史を伝えるため、思いを同じくする人とともに何とかやっている」と話す前田さん。「火災は地域や自身で備えれば防げることも多い。自助・共助が大切」と、火災への備えの重要性をそう表現します。

前田さんは「当時を知る人は少なくなっているが、これからも地域の歴史を守り続けていきたい」と、思いを語りました。

※火災除け・地域の安全を願って行う集会

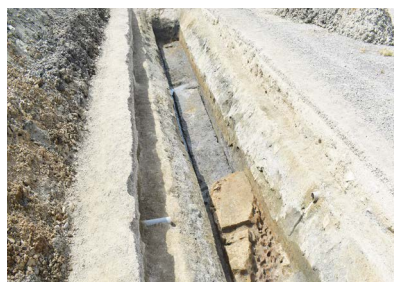
発掘調査現場から (312)

はるか昔の地形を復元する ～上之庄遺跡第 12 次調査～

上之庄遺跡第 12 次調査は、中和幹線沿いの大字上之庄と大字東新堂にまたがる場所で行われました。過去に同じ敷地内で行った第 8 次調査では、鎌倉時代の川跡のほか、古墳時代の川跡から管玉・ガラス小玉とその鋳型・鉄製刀子^{とうす}などの特殊な遺物^{くだたま}^{※1}が出土しました。

今回合計 5 か所の調査区を設定して調査したところ、複数の調査区で川跡と考えられる砂の堆積や、川跡の右岸や支流を検出しました。川の中からは古墳時代の須恵器や鎌倉時代頃の土器などが出土し、第 8 次調査で確認された川の範囲を確認することができました。また、一部で井戸と考えられる遺構^{※2}が見つかり、底からは藤原京の時代（7 世紀末～8 世紀初頭）のものと考えら

れる須恵器壺の破片が出土しました。現在では平らな地面が続いているように見える場所ですが、発掘調査をしてみると川跡など、今とは異なる地形が現れてきます。今回のような調査成果を組み合わせることで、はるか昔の桜井市の地形を復元することが出来るようになります。



◀鎌倉時代の流路
の岸と支流（南
東から）

※1 遺跡から出たもので、持ち運びが可能なもの

※2 柱跡や穴・溝などの生活の痕跡